

使用依拠モデルに基づく第二言語指導の実証的研究

帰納的指導による英語習得の経緯を観察して

泉 瞳

1. はじめに

2020年度から小学校5、6年生で英語が教科となったが、指導法としては従来のPPP型(Presentation-Practice-Production)を踏襲した積み上げ型が主流である。しかしこの指導法では、日本のような外国語環境においては学習した英語表現を実際に使用する機会が限られるため、そのことが学習者の英語力が伸びない一因と考えられており、今後PPP型に代わる効果的な指導法が求められている。

2. 本研究の理論的背景と研究目的

認知言語学のパラダイムにおける使用依拠モデル(usage-based mode)では、言語のみに特化したメカニズムの存在は否定されており、文法とは構造化された慣習的な言語単位の目録であり、言語体系とは使用を通して得られる具体的で頻度の高い構文から、抽象的な例までを含む膨大な言語ネットワークを背景に、人の一般的認知能力を利用することにより、頻度に敏感に反応して構築されると規定されている(Langacker, 2000)。

使用依拠モデルを基盤として母語習得の過程を観察により明らかにした Tomasello は、言語に特化した心的装置の存在を否定しており、子どもの言語は一般的認知能力により習得されるとの立場から、一語文、語結合、軸語スキーマ、項目依拠的構文を経て抽象的構文の習得に至るプロセスを明らかにした。

本研究は認知言語学のパラダイムにおける使用依拠モデルに基づく帰納的指導法を長期にわたって観察し、外国語環境であっても母語習得のプロセスを踏襲した使用依拠的な英語習得が可能であると示すことを目的とする。さらに、母語習得と第二言語習得の類似点と相違点を明らかにし、効果的な第二言語指導に必要な条件を提示することを試みる。

3. 帰納的指導法の概要および研究方法

研究対象である指導法の中心となる言語素材は、通称「BBカード」と呼ばれ、中学三年生までの学習内容に相当する64の英文の絵カード・文字カード各64枚、合計128枚から構成される。それに加えて、カード準拠のワークブック等を使用しており、これらのカードを用いたゲームとインタラクションを中心として、母語習得を理想とした帰納的指導法を行っている。この、ゲームを多用した指導法では、PPP型にみられるような明示的文法指導は一切行われず、生徒はゲーム活動を通して、64の英語の構文をインプットすることから習得を開始する(認知文法の構文の概念に基づき、本研究では64の英文を、習得の核となる構文として捉えるものとする)。ゲーム進行上のルールとして、カードをひく、出す、裏返すなどの際に、生徒は必ず英文をリピートまたはリサイトすることが求められるが、ゲーム自体が目的ではなく、実際には「英語を浴びる環境」を作り出すための手段である。それにより生徒は無意識的に大量の英語を聞いてリピートすることが可能となり、まず直感的に音には意味があることに気づき、次に言語形式に意味があることを理解する。続いて個々の言語形式に対応する意味に気づき、ゲーム中に英文を聞く・発話する等の経験量が蓄積するのに従い、各構文に含まれる言語形式に共通する概念(すなわち文法的規則)を理解するようになるという。

この指導法では単語レベルの小さな項目ではなく、構文全体を1つのかたまりとしてインプットすることから指導を開始するため、学習開始直後は英文全体と絵カードから得られる情報との対応関係で各構文の意味を理解する。ゲームで大量のリピート・リサイトを行いながら、同時に教師とのインタラクションを通じて、生徒は徐々に、英語の構文が分節可能であることを、経験的に理解するようになる。また64構文のうち56が「動作主」と「動詞」の組み合わせとなっており、生徒は主語部分の入れ替えや、動詞項のスロットに入る語の入れ替え等により、複数カードの要素を組み合わせた「合体作文」作りを繰り返し経験する。これにより日本語とは異なる英語の語順および、主語と動詞の複雑な関係を、構文ごとに用例基盤的(exemplar-based)に理解し、最終的には自分で英文を産出することが可能となる。また、教師は指導において日本語をメタ言語として使用しており、母語である日本語の知識を活用して、対応する英語の形式と意味に注意を向けさせることにより、生徒は英文の意味や構造、語彙を無理なく理解することが可能となる。

本研究では、上述の母語習得を理想とした帰納的英語指導を行う英語スクールにおいて、在籍する公立小学校生徒11名(1、2、3、4、6年生)を観察対象とした。学習歴1年目、2年目、3年目の各クラスで、非参加観察法により授業中の活動内容の詳細なデータを収集し、それらに基づき考察を行った。約8ヶ月の観察を通して、使用依拠モデルの観点から第二言語としての英語の習得プロセスを分析し、母語としての英語習得プロセスと比較することにより、両者の共通点と相違点に基づき、帰納的言語習得に必要な条件を検討した。

4. 観察データの分析と考察

Tomasello (1992, 2003)による英語を母語 (L1)とする子供の言語習得研究により、子どもの母語習得は次の6つの段階を経て進むことが明らかになっている。(1) 子どもは生後9ヶ月ごろ「共同注意フレーム」の中で大人の伝達意図を理解できるようになる。(2) 生後1歳前後には一語文 (holophrases) を発話できるようになるが、その中には発話を分節されないかたまりとして学習した「凍結句」が含まれる。(3) 生後18ヶ月前後に発話意図の分節が可能となり、語結合 (word-combinations)を、続いて(4) 軸語スキーマ (pivot-schemas) を発話できるようになる。(5) 2歳前後には特定の動詞ごとに「動詞の島構文」と呼ばれる項目依拠的構文(item-based constructions)を産出し始めるが、個々の動詞ごとに孤立しており、統語構造の理解には至っていない。(6)3歳を過ぎる頃から規則の一般化が可能となり、抽象的構文(abstract constructions)を理解・産出できるようになる。

本研究の対象生徒の英語習得の経緯を分析した結果、母語習得で凍結句のような固まりから習得が始まるのと同様に、英文を分節されないままの「かたまり」して習得を開始する点で両者に共通点が見られた。小学生は幼児より認知能力が高く、すでに母語である日本語の習得経験から言語習得方略を知っているため、母語と第二言語の習得を単純に対応づけることはできないものの、両者の言語習得の経過には類似した特徴が見られ、母語 (L1)と第二言語 (L2) の習得段階を、おおよそ以下のように対応づけることができる。下線部は対応関係がL1の複数の段階にまたがっていることを意味する

L1	L2
(1) 伝達意図理解	・英文を大量にインプットしている段階 (不完全なリピート) : L1 (1)
(2) 一語文 (凍結句)	・音声でのリピートができる (完全なリピート) : L1 (2)
(3) 語結合	・各英文の意味と絵のマッピングが成立する (リサイトできる) : <u>L1 (3), (4), (5)</u>
(4) 軸語スキーマ	・動詞項ごとにスロットに入るべき語を識別できる (文構造への気づき) : L1 (5)
(5) 項目依拠的構文	・各スロットに適語を入れ英文を産出できる (構文の型による作文) : <u>L1 (5), (6)</u>
(6) 抽象的構文	・64構文から帰納的に文法を理解し英文を産出できる (自由作文) : L1 (6)

5. 結論

外国語環境において使用依拠的な第二言語習得を成功させるためには、豊富なインプットが不可欠であり、それに加え、日本語をメタ言語として英文の構造への気づきを生じさせることが重要であることがわかった。また、使用依拠的の第二言語習得と母語習得プロセスには、主に2つの共通点が見られた。まず第一に習得される構文の単位が、大きいかたまりから始まり、徐々に小さな部分へと進むことである。この点はPPP型指導において、単語のような小さな項目から学習を始め、徐々に大きな言語構造へと学習を進めるのとは対照的であり、積み上げ型よりも学習開始時から全ての言語材料を提示して使用頻度を高めるほうが習得が容易であることを示唆している。第二に言語習得が動詞を中心として進むことである。本研究の例では、生徒は各構文ごとに動詞項のスロットに入る語彙を用例基盤的に習得していた。この点は英語幼児の母語習得プロセスで、個々の動詞ごとに用例を習得している段階では規則の一般化は起こらず、「動詞の島構文」として孤立していることと類似している。いずれの場合においても具体的構文の習得が先行し、後になって共通するスキーマの抽出が可能となって、規則の一般化がなされる。

このように母語習得と使用依拠的の第二言語習得には「全体から部分へ」、「具体から抽象へ」という共通の方向性が見られ、伝統的文法シラバスの指導の基本である「小さく簡単な項目から、徐々に複雑で大きな言語構造へ」、「文法 (抽象)」から「事例化 (具体)」といった進捗とは対照的である。また、日本語をメタ言語としてインタラクションを行うことにより、生徒の注意を特定の言語形式に向けさせることが可能となり、生徒自らの気づきにより言語規則の理解が促されるため、学習意欲を引き出すことにもつながる。よって以上で述べたL1習得とL2習得の2つの共通点は、現行の英語指導法を見直す上で新たな示唆を与えるものと考えられる。今後の課題として、使用依拠モデルに基づく帰納的指導法と従来の文法シラバスによるPPP型指導法を、量的・質的側面から比較、検討する必要がある。

6. 参考文献

- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol.1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2000) A dynamic usage-based model. In M. Barlow & S. Kemmer (Eds.), *Usage-based models of language*, pp. 1-63. Stanford: CSLI Publication.
- Tomasello, M. (1992) *First verbs: A case study of early grammatical development*. New York: Cambridge University Press.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Boston: Harvard University Press.